

(二〇一四年度)

## 5 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は21ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章は、安部公房「猛獣の心に計算器の手を」の中から小説の「作者」と作者の内にも存在する「読者」との関係に関する議論を抜き出したものである。これを読んで、後の問に答えよ。

作者の第一課は、読者を知るための、読者との闘いだと言ってもいいでしょう。作者が読者から発生する仕方は、読者が自分——作品によっておきた自分の感情の波動——を鏡にうつし、客体化してみることで、作者的部分が自分と分離し対立するという形をとります。この対立と闘争は、終始、作家が作家であることをやめるまでつづきます。だから、読者との格闘は、<sup>1</sup>作家のアルファでありオメガだと言えるでしょう。

しかし、ここで注意しなければならないのは、読者をせまい常識的な意味でうけとってはならないということです。読者の本当の声(たとえばゴリキーの書いたような)を聞かずに、読者の現象的な要求にすっかり従ってしまったのでは、現実の認識と発見(リアリズム)という小説本来の意味を見失ってしまうことになります。小説が魂の技術であるということは、読者の魂を改造変革して、現実を見る新しい眼をあたえることなのです。だから、ゴリキーの言う鞭<sup>むち</sup>がどうしても必要なわけです。読者は自分の中に眠っているものをよび覚ましてくれるように、作者に要求しているのです。

もっとも、魯迅<sup>ろしん</sup>も言っているように、一切の宣伝がすべて文芸であるわけではありません。ちょうどそれは一切の花には色があります、すべて色のあるものは必ずしも花であるとは限らないのと同様だと彼は言っています。ここで読者の歴史的、社会的意味を深く理解しなければならなくなってきます。

<sup>2</sup>読者は小説を読んで変革されるのであって、変革されて小説を読んだ気持になるのではないのですから、小説でないものを小説だと言いくるめようと思っても、それはむりです。理論的な解説をあたえても、宣伝にはなりません。小説はそうした結論をあたえるのではなく、魂に変化をあたえて新しい結論を読者がつかむ手助けをするようにしなければなりません。では、小説が小説であるための規準はなにか？

それは歴史的につくられた小説の遺産の上にたって考えなければならないことです。人間の魂とは、そうした遺産の蓄積に

ほかなりません。その研究によって、はじめて魂に直接呼びかける技術も手に入れることができるというものです。読者とは、伝統の中から、伝統をこえて未来を見ようとする、歴史的な力なのです。読者は過去と現実の交叉点<sup>3</sup>なのです。

読者の中に蓄積された、過去の文学を学ぶこと、これが作者に課された第二課でしょう。書きたい、という作者の衝動は、単に現実からうけた直接的な感動だけではなく、かならずそれを小説という形で表現し、読者につたえたいという欲求とむすびついています。その場合、作者の心の中には作品によっておこる読者の感情の波動が、事前に予想されているのです。小説という構造の眼鏡をとおして、再構成された現実を予想しているのです。これは作者が読者から生れたものであり、いままな読者を心の中に住まわしているからにはかなりません。作者は読者になりきること、あるいは自分の中の読者を呼出すことで、創作を自分自身の内発的な要求にすることができません。それは作者自身が、過去の作品(かならずしも古典という意味ではない)に接し、感動したという体験を基礎にしています。

意識するとしなやかにかかわらず、作者が自分の中の読者、その中に蓄積された過去の作品をもとに、創作の動機をつかむという関係から、のがれるわけにはいきません。その場合、その点を意識的にとらえ追求することをおこたるなら、作品はかならず主観的なひとりよがりなものになってしまうでしょう。<sup>4</sup>形容詞と抽象名詞の過剰におちいる原因です。いそいでいるので、自動車を借りてはみたが、運転の仕方が分らないので、ハンドルをつかんでただバタバタあばれてみるようなものです。読者の要求の半分しか見ていないのです。

形容詞が過剰になると、なにを言っているのか分らないものになります。抽象名詞の多い、論文のような小説は、分りすぎるほど分るが、さっぱり感動のないものになってしまいます。これは反対の傾向のようですが、小説を社会的生産物として客観的に見ないところからおきる一つの偏向の裏表にすぎません。作家は、衝動(読者の衝動的なもの)と同時に、それをつきはなして見る技師でなければならぬのです。円の軌跡が描かれるためには、遠心力と求心力がなければならぬように、作品は作者と読者という対立物の弁証法的統一として、はじめて作品としての効果をもちうるのです。運転が合理的で正確であればあるだけ、スピードが増すように、描写の正確と冷静が、高い情熱をつたえうるのです。

手と心の統一、言いかえると、作家はその仕事のあいだ、読者になりきろうとし、しかも自分であることを保つ、その緊張の持続の中にいなければなりません。これが作者の第三課でしょう。はやる心を手が抑え、しぶる手もとを心がせきたてるのです。この苦痛をのがれようとして、心のままにまかせたり、手の力をはぶくために心を窒息させたり、二つの力を妥協させたりするのは、作者の墮落以外の何物でもありません。猛獣の心と計算器のような手、これが作者の理想です。

さてこの論文も終りにちかづいて、やっと問題の入口にさしかかったようです。「なぜ」書くのかという動機から、「何を」と「いかに」がうまれてくる道筋を、どうにかのみ込んでもらえたのではないかと思えます。動機が作者と読者の分離点にあり、その対立闘争を経て、再び統一されたのが作品だというわけです。

つまり小説の構造と書き方は、以上の関連の全体を、Iにつかむ以外にないのです。現実が複雑であるように、小説の内容と形式も多種多様です。人間と事件、人間と人間、人間の内部と外部、それらを個性を通じて、人間の集団をとおして、事件を追求する中で、人間の行動をとおして、あるいは心理を媒介にして、といった具合で、どれにも共通した一般的な書き方など、とうていきめられるものではありません。それらを、学問的に、短篇小説の構造、長篇小説の構造、心理小説の構造、などと分類比較することはむろん不可能ではないでしょうが、そうして得た結果が複雑難解であるわりに、技術面での応用価値は少いものです。それよりも、本を沢山読み、その感動を客観的に整理しなおし、たえず自分の中の作者と読者の対話において経験を蓄積する習慣を身につけることのほうが大事なのです。せまい意味での小説作法は、考えたより容易なことで、一見容易にみえる作家としての根本をつかむことのほうが、はるかに困難なのです。文章の書き方など、作者と読者の緊張の中で自分をたえず意識していれば、わけなくうまくなるものです。それは習うべきものでなく、発見すべきものだからです。

たとえば、ある面白い事件を、事件のことはろくに書かずに、面白かったとか愉快だったとか、形容詞だけならべたのでは読者に事件の性質を結論としてつたえるだけだが、それを形象として、事件の内容を具体的につたえれば、読者は感性的に面白い感情を味わうことができ、さらにその面白さの本質をえぐり出してみせることに成功すれば、読者はそこから学ぶことさ

えでできる——という事実は、思想上の問題であり、(コロンブスがアメリカを発見したように)事件の中から典型を発見したことなのですが、文章の上達などこの追求の過程の中に必然的な結果としてふくまれてくるものです。文章は双眼鏡のピントを合わせるネジみたいなので、対象に合わせて自分でさぐり出さなければならぬが、理窟が大変なわりには、やってみれば案外誰でもすぐできるといったものなのです。すぐれた文章とは結局、典型(理性的認識の結論が定式であること)に対応して、感性的認識の結論にあたるものをえがいているということにはかならないのですから。

ところで、典型によって読者の頭の中に引きおこされる感情とは、いったいどのようなものでしょうか？ 典型についての理論を知らなくても(むろん知ったほうがいいにちがいないが)、すぐれた作品によって、誰でもそれを体験することはできるわけです。作者もまた、自分の中の読者によって、それを体験することができます。作者は体験しながら、その体験を客観的に見なおし、より一般的普遍的な体験として、頭の中の整理棚に蓄積するのです。この作業もまた、読者との共同で行われます。この整理棚は、度重なる読書によって豊富になり、そして実際上の創作行為によって、整理されていくのです。この蓄積の整理こそ、文章の上達、もっと広く言えば、心に対する手、「なにを」に対する「いかに」にあたるものなのです。この整理棚の存在が、作者の主観的な衝動、遠心力を制御して客観的にする、求心力の作用になるわけです。

(注) ゴーリキー…ロシアの小説家・劇作家。筆者はこの文章の直前にゴーリキーの『読者』という短編を引用している。

魯迅…中国の文学者。

問一 傍線部1はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 作家にとって、小説の意味を確認するうえで留意しなければならない重要な問題である。
- b 作家にとって、読者と作家の対立を否が応でも意識させる問題である。
- c 作家にとって、創作に付随して立ち現れてくる、避けて通れない問題である。
- d 作家にとって、第一歩であると同時に取り組むべき究極の問題である。

問二 傍線部2のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 読者の魂に変化をあたえることが仮にできても、小説を読むという行為を通してそれを行っていなければ、作者の目的は、結局のところ達成されたとはいえないから。
- b 読者は小説を読んで変革されることを望んでいるのであって、理にかなった宣伝だけでは、小説として不十分なものに終わってしまうと考えられるから。
- c 意識の変革が起きた後に小説を読んでも、それでは小説が読者の魂を変革したことにはならず、小説の効用が証明されたことにはならないから。
- d 読者の魂を根本から変革できるのが小説の働きであって、仮に理論的な説明を行っても、それは結論を先取りして与えたに過ぎず、読者が自身で真実を発見する力にはならないから。

問三 傍線部3はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 歴史的に積み重ねられてきた小説の遺産を背負いながらも、読者はそれを否定し、現実をあばき出す新しい作品を常に待ち望んでいる存在である。

b 読者は、小説を読む際に、意識的にせよ無意識的にせよ、これまで読んできた小説を重ね合わせながら両者の比較を行っている。

c 読者は、それまでに読んだ小説から受けた感動の蓄積を土台としながら、小説から新たな現実を発見する眼を獲得している。

d 読者が過去の作品を読みつくことは、作家が現実を直視し、新たな作品を生み出すことと、これからも並び行われていく行為である。

問四 傍線部4の「形容詞と抽象名詞の過剰」とはどのような状態か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 形容詞も抽象名詞も、作家の主観が反映されやすいため、描写が分かりにくくなっている状態。

b 表現上、必要不可欠な形容詞や抽象名詞ではあるが、他の品詞との量的なバランスを欠いている状態。

c 具体的な出来事の描写をほとんど行わず、その出来事の意味づけや評価のみを書き連ねた状態。

d 読者にとって明解で分かりやすい部分と意味の取りにくい部分が同居する中途半端な状態。

問五 傍線部5について以下のA・Bに答えよ。

A 「猛獣の心と計算器のような手」とはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 読者の魂をゆさぶろうとする衝動と、出来事を正確かつ冷徹に写し取る文章表現。
- b 書かずにはいられないという作家の情熱と、それでもなお読者の立場に立とうとする冷静な視点。
- c 作家に外から働きかける読者の感情の波動と、それを客観的な文章として定着させるための技術。
- d 制御することがかなわない読者に対する闘争心と、それを表面に出さずに抑制するための手段。

B 筆者は「猛獣の心と計算器のような手」のどのような状態を「作者の理想」と考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 矛盾する両者を作品に生かすという目標に向かって、どこまでも妥協しない態度を保ち続けている状態。
- b 対立する両者を押さえつけずに、一つの作品の中に共存させた状態。
- c 相反する両者が力をゆるめることなく拮抗しながら、その統一体としての作品に結実している状態。
- d 反発する両者をそのまま作品の中で利用し、作家の裏側に隠れる読者の側面をあぶり出している状態。

問六 Iに入る語句としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 主観的
- b 実践的
- c 歴史的
- d 客観的
- e 理論的



問七 傍線部6は、どのようなことのとえとして用いられているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 目標を達成する際の求心力となるもので、一見難しそうだが、案外簡単にやりおかせてしまう。
- b 自分の力で達成すべき問題ではあるが、理論的に難しい点があっても、実践すれば存外容易である。
- c 自分で対象を探さなければならぬが、その過程に難解な点があっても、最後には結局完成できる。
- d 遠方の到達点を発見するためのもので、自分で探り出すことさえできれば、有効に活用できる。

問八 傍線部7について、筆者のいう「典型」とはどのような性質のものか。次の中から適切なものを二つ選べ。

- a 自分の読書経験を重ね合わせていくことにより現れてくる、読書の面白さの本質となるもの。
- b 理性的認識と表裏一体の形で引き起こされる、文章に対する感性的認識が積み重なって体得されたもの。
- c 作品を享受する読者にとって、そこから得る感動をあらかじめ予想させるもの。
- d 読書という行為に先立って存在する、自分自身の価値判断を行うための基準となるもの。
- e 様々な文章から理論的に導き出された型ではなく、作品との出会いという実体験から身についたもの。

問九 傍線部8はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 「なにを」が問題ではなく、「いかに」が優先されるという観点が、読者としての体験を客観的に整理することによって作家に作用するようになる。

b 作品を通して得られた体験を整理することが、作者の主観的衝動を徐々に客観的な求心力へと変えていく原動力となる。

c 実際の創作行為により整理された、作品を読むことで引き起こされた個別的感情の記憶こそが、作家が文章を上達させていくための鍵となる。

d 読書を重ねることを通して導き出された普遍性を備えた体験が、創作に対する作家の内なる衝動とつりあう形で機能するようになる。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

年ごろは別にさることもなかりしに、をととしの秋、葛城にてこそ、あさましきこと<sup>A</sup>にあひ侍りたりしか。つねよりも心すみて、あはれにおぼえて、経を誦したてまつりしに、谷のかたより人の気色のしてまうで来しかば、いと物おそろしくおぼえながら、経を誦したてまつりしに、九月上の十日頃のことにて、月の入りがたになり侍りし程に、ほのかにそのかたちをみれば、翁の姿したるもの、あさましげに<sup>B</sup>瘦せ、神さびたるが、藤の皮を編みて衣とし、竹の杖をつきたるが来たれるなりけり。

やうやうかたはらへ来寄りて言ふやう、「御経のいとたうとくきこえ侍りつれば、まうで来たる」といふ。

ものおそろしくおぼえ侍りしかども、鬼魅などの姿にもあらざりしかば、仙人といふものにやと思ひて、かく申す程に、八の巻のすゑつかたなりしかば、また一部を誦して聞かせ侍りしかば、この仙人よろこびて、「修行し給ふ人おほくおほせども、まことしく仏道を心にかけて給ふやらんと見たてまつるが、たうとくおぼえ侍るなり。いかなることにて心をおこしめ給へりしぞ」と問ひしかば、さきに申しつるやうに申ししを、仙人聞きて、「いとかしこきことなり。大かたは今の世をはかなく見うとみ給ひて、いにしへはかくしもあらざりけん<sup>2</sup>とあさくおぼすまじ。すべて三界はいとふべきことなりとぞおぼすべき。この目の前の世のありさまは、折りにしたがひて、ともかくもなりまかるなり。いにしへをほめ、いまをそしるべきにあらず。神代よりこの葛城吉野山などをすみかとして、時々はかたちをかくして、みやこのありさまも、諸国にいたるまで、見聞きて過ぎ侍りき。よしなきことどもに侍れども、御経をうけたまはりぬる悦びに、ひとへに目の前のことばかりをのみそしる心おはして、いにしへはかくしもなかりけんなどおぼす、一筋なる心のおはするかたをも申し聞かせば、一分の執心をもうしなひたてまつりなば、仏道にすみ給ふかたなどもなかならざらむ。神の世より見侍りしこと、おろおろ申し侍らん」と言へば、「いみじくうれしく侍るべきことなり。生年二十などまでは、男のまね方にて、世にたちまじらひ侍りしかども、はかばかしく昔のこと考へみることもなかりき。ただあそびたはぶれにて、夜をあかし日をくらしてのみ過ぎ侍りしに、ちかごろのことなど

を人のかたりつたへ申すをきくに、この世の中はいかにかくはなりまかるやらんと、ことにふれてあはれにのみおほえて、かかる道に入りたれば、一かたになべての世をそしる心ある罪<sup>8</sup>もさだめて侍らん。いでなたまはせよ。うけたまはらむ」と言ふに、仙人のいはく、「さては、この世のありさまのみならず、内典のかたなどもうとくこそはおはすらめ。はしばしを申さむ」。

(「水鏡」)

〔注〕 葛城…奈良県西部、金剛山の東斜面一帯の地域。

八の巻…全八巻ある「法華経」の第八巻。

三界…仏教で、衆生が生死輪廻<sup>りんね</sup>する欲界・色界・無色界の三種の世界。

内典…仏教に関する書物。

問一 波線部A「あさましきこと」、波線部B「あさましげに」、波線部C「かしこきこと」、波線部D「おろおろ」の意味として、もつとも適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

A 「あさましきこと」

- a 興ざめなこと
- b 予想外なこと
- c みじめなこと
- d あきれるようなこと

B 「あさましげに」

- a 興ざめなほどに
- b 予想外なほどに
- c みじめなほどに
- d あきれるほどに

C 「かしこきこと」

- a 利口なこと
- b 立派なこと
- c 頭のいいこと
- d おそれおおいこと

D 「おろおろ」

- a いいかげんに
- b ところどころ
- c おおざっぱに
- d ほつほつ

問二 傍線部1「いかなることにて心をおこしそめ給へりしぞ」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a どういうことをして、心を入れ替えようとし始めたのですか。
- b どういうことがあって、仏道修行を思い立ったのですか。
- c どういうことがあって、気配りをしようと思いついたのですか。
- d どういうことをして、立身出世をしようと思いついたのですか。

問三 傍線部2「さきに申しつるやうに申しし」の内容は、出題文より前の場面にある「すこし物の心つきてのち、この十余年世のなりまかるさまの、心とどむべくもみえ侍らねば、人まねにもし後世やたすかるとて、かやうにまどひありき侍るなり」を指している。その内容に対応している問題文中の箇所は、次のうちどれか。次の中からもっとも適切なものを選べ。

- a すべて三界はいとふべきことなりとぞおぼすべき
- b ひとへに目の前のことばかりをのみそしる心おはして、いにしへはかくしもなかりけんなどおぼす
- c ただあそびたはぶれにて、夜をあかし日をくらしてのみ過ぎ侍りに
- d この世の中はいかにかくはなりまかるやらんと、ことにふれてあはれにのみおぼえて、かかる道に入りたれば

問四

なぜ、傍線部3「大かたは今の世をはかなく見うとみ給ひて、いにしへはかくしもあらざりけんとおほすまじ」の  
ように言うのか、その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 今の世の中は悪くなっていくばかりで、期待すべきことはないから。
- b 出家した人間が現世のことに関心を持つべきではないから。
- c 誰もが皆、今の世の中に幻滅しており、昔はよかったと感じているから。
- d いまの時代を批判し、昔はよかったと考えるのは、間違っているから。

問五

傍線部4「ともかくもなりまかるなり」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a どうにでもなるものです。
- b どうにかこうにかやっつけていけるものです。
- c だんだんと変わっていくものです。
- d どうにでもしていけるものです。

問六

傍線部5「一筋なる心」及び傍線部6「一分の執心」についての説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「一筋なる心」も「一分の執心」も、ともに熱心に仏道を修行しようとする気持ちをさしている。
- b 「一筋なる心」は熱心に仏道を修行しようとする気持ちであるが、「一分の執心」は現世に対する執着心である。
- c 「一筋なる心」は、現世を批判する心であり、「一分の執心」は現世への執着心である。
- d 「一筋なる心」も「一分の執心」も、現世を批判し、過去におぼされる気持ちをさす。

問七 傍線部7「いみじくうれしく侍るべきことなり」と述べる理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 若いときは、ふつうの男性のように遊んで暮らし、無駄に過ごしてきたと思っっているから。
- b 過去を美化しがちな自分たちのものの考え方を訂正するきっかけになると考えたから。
- c なぜいまのような時代になったのが、歴史的な経過によって明らかになると思われるから。
- d 自分に不足している仏教に関する知識を補ってもらうことができると思ったから。

問八 なぜ、傍線部8のように「罪」というのか。その理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a いまの時代も過去の時代もすべてよくなかったと考えるはならないから。
- b いまの世の中を否定し、過去にあこがれるのは間違っているから。
- c 仏道修行を志した人間は、現世への執着を捨てるべきだから。
- d 世間の常識についても仏教に関する知識についても十分に知っている必要があるから。

問九 『水鏡』に関する次の(1)(2)の問いに答えよ。

(1) 次のうち、『水鏡』と同じジャンルに属する作品を二つ選べ。

- a 今鏡      b 紐鏡      c 増鏡      d 遠鏡      e 姫鏡

(2) 次のうち、『水鏡』と同じ時代を扱っている書物の一つ選べ。

- a 日本書紀      b 栄華物語      c 平家物語      d 太平記



三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、この文章の作者はもと幕府に仕えた儒者であった。また、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

余失<sup>レ</sup>官<sup>ヲ</sup>喪<sup>レ</sup>家<sup>ヲ</sup>、携<sup>ニ</sup>妻<sup>ヲ</sup>兒<sup>ヲ</sup>与<sup>ニ</sup>琴<sup>書</sup>、来<sup>リ</sup>寓<sup>ニ</sup>灑<sup>東</sup>柳<sup>圃</sup>之<sup>ニ</sup>莊<sup>ニ</sup>。莊<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup>牛<sup>神</sup>社<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>脊<sup>ニ</sup>秋<sup>葉</sup>山<sup>ヲ</sup>。有<sup>ニ</sup>園<sup>之</sup>可<sup>キ</sup>鋤<sup>、</sup>有<sup>ニ</sup>池<sup>之</sup>可<sup>キ</sup>鉤<sup>。別</sup>有<sup>ニ</sup>田<sup>數</sup>頃<sup>、</sup>足<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>出<sup>ニ</sup>一<sup>歲</sup>之<sup>租</sup>。中<sup>ニ</sup>設<sup>ニ</sup>小<sup>樓</sup>一<sup>椽</sup>、可<sup>シ</sup>坐<sup>シテ</sup>而<sup>シテ</sup>望<sup>ニ</sup>堤<sup>上</sup>花<sup>ヲ</sup>。而<sup>シテ</sup>於<sup>ニ</sup>夏<sup>之</sup>風<sup>、</sup>秋<sup>之</sup>月<sup>、</sup>冬<sup>之</sup>雪<sup>、</sup>皆<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>宜<sup>シカラ</sup>者<sup>一</sup>也。莊<sup>ニ</sup>初<sup>メ</sup>無<sup>レ</sup>名<sup>。人</sup>勸<sup>ム</sup>以<sup>ニ</sup>雪<sup>花</sup>風<sup>月</sup>之<sup>勝</sup>命<sup>之</sup>。余<sup>不</sup>肯<sup>ズ</sup>焉。故<sup>ニ</sup>命<sup>ズル</sup>以<sup>ニ</sup>松<sup>菊</sup>。蓋<sup>シ</sup>取<sup>ル</sup>諸<sup>婦</sup>去<sup>来</sup>辞<sup>也</sup>。昔<sup>ニ</sup>司<sup>馬</sup>氏<sup>之</sup>亡<sup>、</sup>謝<sup>レ</sup>官<sup>棄</sup>俸<sup>耕</sup>而<sup>シテ</sup>終<sup>ハレリ</sup>矣。者<sup>ニ</sup>君子<sup>人</sup>也。雖<sup>シ</sup>無<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>弁<sup>於</sup>其<sup>時</sup>、而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>仕<sup>而</sup>隱<sup>ル</sup>之<sup>志</sup>可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>付<sup>ハカル</sup>。雖<sup>シ</sup>然<sup>也</sup>、非<sup>シ</sup>背<sup>世</sup>悖<sup>人</sup>、故<sup>シ</sup>表<sup>奇</sup>節<sup>、</sup>以<sup>テ</sup>伝<sup>名</sup>于<sup>後</sup>世<sup>者</sup>。樂<sup>ニ</sup>其<sup>所</sup>可<sup>樂</sup>者<sup>而</sup>終<sup>ニ</sup>其<sup>生</sup>耳。蓋<sup>シ</sup>所<sup>レ</sup>安<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>之<sup>心</sup>、而<sup>シテ</sup>亦<sup>所</sup>安<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>余<sup>之</sup>心<sup>耶</sup>。書<sup>シテ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ニ</sup>莊<sup>之</sup>記<sup>ト</sup>。明治<sup>戊</sup>辰<sup>九</sup>月。柳<sup>北</sup>隱<sup>士</sup>。

〔注〕 ○ 瀑東―隅田川の東岸。向島須崎村を指す。 ○ 牛神社―向島にある牛島神社。 ○ 秋葉山―向島にある秋葉大権現

(秋葉神社)。 ○ 司馬氏―東晋の皇族。

問一 空欄  X には「帰去来辞」の作者の名が入る。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 陶淵明
- b 杜甫
- c 白居易
- d 蘇軾

問二 傍線部1「与」、3「謝」と同じ字義で用いられているものはどれか。それぞれ次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

1 a 礼、与<sub>レ</sub>其奢也、寧儉。

b 天下知与<sub>レ</sub>不知、皆为流涕。

c 天子不能<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>天下与<sub>レ</sub>人。

d 桓公知<sub>レ</sub>天下諸侯多与<sub>レ</sub>己也。

3 a 輕<sub>レ</sub>罪省<sub>レ</sub>功、以<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>于百姓。

b 同結<sub>レ</sub>丘中緣、塵埃自<sub>レ</sub>茲謝。

c 自<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>第迄<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>事、四十年在<sub>レ</sub>官。

d 群花謝、愁对<sub>レ</sub>艷陽天。

問三 傍線部2「以雪花風月之勝命之」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 作者の住まいに、四季折々の自然美に恵まれていることにちなんだ名前をつけること。

b 官職こそ失ったが、自然に囲まれた邸宅で暮らせることを運命として受け入れること。

c 雪・花・風・月のうち、作者が最も好むものにちなんだ名前を、住まいにつけること。

d 作者の邸宅の名前を、そこから楽しめる様々な風景に基づき、誰かに考えさせること。

問四 傍線部4「雖無論弁於其時」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a その当時の国や政治のあり方を批評したりはしなかったけれど
- b その当時の状況に対処すべき方策を建言したりはしなかったが
- c その当時の自らの心境や考えを論じたりはしなかったけれど
- d その当時において何ら語るべき思想はもっていなかったけれど

問五 傍線部5「非背世悖人、故表奇節、以伝名于後世者」の書き下し文としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 世に背き人に悖るに非ざれば、故に奇節を表し、以て名を後世に伝ふる者なり。
- b 世に背き人に悖り、故らに奇節を表すに非ずして、以て名を後世に伝ふる者なり。
- c 世に背くに非ざるも人に悖り、故に奇節を表し、以て名を後世に伝ふる者なり。
- d 世に背き人に悖り、故らに奇節を表し、以て名を後世に伝ふる者に非ず。

問六 傍線部6「樂其所可樂者而終其生耳」に返り点を施した次の選択肢の中から、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 樂其所可樂者而終其生耳。
- b 樂其所可樂者而終其生耳。
- c 樂其所可樂者而終其生耳。
- d 樂其所可樂者而終其生耳。

問七 この文章を書いた作者の心境はどのようなものと考えられるか。次の中から適切なものを二つ選べ。

- a 幕府が瓦解し、職も家も失ってしまった作者は、明治維新政府が進める日本の近代化に懐疑的な思いを抱いている。
- b 文人らしい闊達な性格の作者は、旧幕府時代のことはさりと忘れ、新しい住まいでの生活を楽しもうとしている。
- c 作者は時代と境遇の激変に対して複雑な思いを抱いているが、風流三昧の生活の中にそれを押し隠そうとしている。
- d 作者は、かつて自分の仕えた王朝の滅亡になすすべもなかった中国の詩人に自らを重ね、無力感にさいなまれている。
- e 作者は、王朝の滅亡に際し、俗世間との関わりを絶って忠節の心を汚すまいとした中国の詩人にならおうとしている。
- f 江戸的な風雅の世界を愛する作者は、中国の詩人に自らをなぞらえ、明治という新しい時代から逃避しようとしている。